昭和における外国人との共生と引き継がれる住環境の価値

―神戸市垂水区塩屋を対象に―

主査　水島　あかね*1
委員　野中デュルト　沙羅セシィル*2

神戸市塩屋は, 明治以降に外国人が多く居住した地域で, 昭和初期に開発されたジェームス山外国人住宅地が現存する。近年は若い世代やクリエイターの移住や店舗の新規開店が相次ぎ, 新旧の住民が共生している地域でもある。本研究では, 昭和の記憶を持つ住民への聞き取り等により, 住民と外国人との日常での直接的な関わりはあまりなかったものの、外国人の増加により, 外国人と関わる仕事が創出されたこと, ジェームス山があるために戦時中安全だったと信じられていたことなどから, 戦争を経ても外国人を好意的に受けとめ、異文化を受け入れる土壌は, 外国人との共生により生まれ今日の塩屋に引き継がれていることを明らかにした。

キーワード：１）神戸市垂水区，２）塩屋，３）外国人，４）移住者，５）異文化共生，
６）洋館，７）ジェームス山，８）リゾート地，９）別荘地，１０）太平洋戦争

Coexistence with Foreigners and the Value of the Inherited Residential Environment in the Showa Era

-Focus on Shioya, Tarumi-ku Kobe-

Ch. Akane Mizushima
Mem. Sara Cecile Durt Nonaka

In Shioya, Kobe, where many foreigners have lived since late Meiji, still exist a foreigners residential area called James-yama, developed in the early Showa. Today, younger generations move and open new shops, creating a symbiosis between old and new residents. This study, through interviews with local residents, revealed that although direct relationship with foreigners were restricted, the increase in the number of foreigners created jobs and the belief in James-yama protecting Shioya from air raid made people feel familiar to foreigners. This acceptance of different cultures cultivated through coexistence with foreigners has been carried over to Shioya today.

1. はじめに

1.1　研究の背景と目的

神戸市垂水区, 六甲山脈の最西端に「塩屋」という地域がある。この地は, 市内で最も山と海の距離が近く, 大阪から神戸を経て明石へと連綿と続く市街地が一旦途切れる地である。かつては塩屋の西端にある境川が国境で, 西が播磨国, 東が摂津国だった。東隣に位置する須磨は, 古くから風光明媚な土地として, 源氏物語にも登場するほど名高いが, 明治に入るまでの塩屋は海沿いに家々が少しあるだけの僻村だった。

塩屋は神戸と明石の間に位置し, 神戸の中心地である三ノ宮から電車で 18 分ほどの距離にある。山陽電車と JR が通っているが, いずれも普通電車しか停車せず, 駅前にはロータリーがない。そして急勾配の坂道や狭い路地に住宅が密集しているため, かつては安全性や利便性の向上を求めて再開発を求める声も少なくなかった。しかし近年は, その不便さゆえに生み出される人のつながりや風景に心地よさを覚え, 塩屋に魅了された若い世代やクリエイターなどの移住や新規開店が増えている。

このような変化が起こった背景には, 塩屋まちづくり推進会や塩屋商店会[注1)], 旧グッゲンハイム邸[注2)]を拠点に活動するシオヤプロジェクトなどが共に連携しながら進めてきた様々な活動がある。住民の手で地域の魅力を発掘してきたこと, それを基にしたイベントを企画してきたこと, それらの活動を通じて日々の暮らしの延長にあるまちの楽しみ方を発信してきたことなどが, 若い世代やクリエイターの巻き込みにつながったといえる。

しかしながら, まちのイメージ創出やイベント実施だけでは, 移住者や新規店舗の参入には繋がらない。良いイメージで語られる「人とのつながり」も, それを好まない人にとっては, 地域に馴染む際の大きなハードルとなりうる。つまり受け入れる地域の側に, 異文化を受け入れる土壌が

[1] 明石工業高等専門学校　准教授 博士（学術）　*2 旧グッゲンハイム邸　修士（西洋美術史学・文化資源学）

培われていることが重要である。

実は,塩屋は明治中頃以降に,神戸に居留した外国人により別荘地,リゾート地として開発されたという歴史を持つ。1896年に山陽鉄道（現JR山陽本線）,1913年に兵庫電気鉄道（現山陽電鉄）の塩屋駅がそれぞれ設置され,神戸都心からのアクセスがしやすくなると,喧騒を逃れて移住する外国人が増加した。また当時は塩屋の海沿いにはリゾートホテルがあり,休日になるとマリンスポーツを楽しむ外国人が多く訪れていた。昭和に入ると,1933年より英国人実業家E.W.ジェームス（Ernest William James,1889-1952）[注3)]が,自邸建設に加え,後背地に塩屋カントリークラブの施設と53軒の賃貸住宅からなる外国人専用の住宅地を開発した。この住宅地は,通称ジェームス山と呼ばれ,今もゲーテッドな外国人専用住宅地として存在する。ジェームス山の開発により塩屋在住の外国人はさらに増え,戦前期の塩屋は,北野・山本通に次ぐ神戸有数の外国人居住地となった。

そこで本研究では,外国人（主に西洋人）と共生してきた明治後半以降,特にジェームス山開発後の昭和の塩屋の歴史に注目する。クリエイターや若者など多様な人々を受け入れている現代の塩屋の地域性は,この特殊な歴史の中で培われてきたのではないだろうか。文献調査や戦前戦後期の塩屋を知る住民等への聞き取り調査を通じて,異文化を受け入れてきた暮らしの実態を明らかにすることを目的とする。そして多様化する今日の社会を考える上で重要な異文化共生のあり方についての考察を試みる。

1.2　研究方法と先行研究

本研究では，戦前戦後期の塩屋に在住した人々への聞き取り,地図や文献等による裏付け調査等により,①塩屋における外国人の居住実態の解明,②地域住民と外国人との関わりと当時の暮らしの解明,③外国人と共生してきた昭和期の塩屋の暮らしについての考察を行う。

これまでの研究により,ジェームス山を中心とした外国人の土地取得と運用に着目した塩屋の変容過程,特に戦前戦後期のジェームス山の住宅分布と居住外国人の実態の解明は進んでいる[注4)]。そして,戦前は日本で事業を立ち上げたり,帰化したりして長く塩屋に居住する外国人が多かったが,敵国人となり帰国した外国人の多くは戻らず、戦後その人口は減少したこと,今日,塩屋に居住する外国人の多くはジェームス山に短期滞在している駐在人であることなどが分かっている。しかしながら,外国人に着目しているため,この間の塩屋住民との関わりについては,未だ明らかになっていないことが多い。

また近年は,地域住民主体でリノベーションが行われている塩屋に注目し,「ヒト・モノ・コトの連鎖的ネットワークを生じるリノベーション」の有用性を明らかにしようとした研究[文6)]や歴史的建造物を通じたまちのアイデンティティの醸成・継承過程の解明を試みた研究[文7)]など,人の繋がりに着目した研究もみられるようになってきた。しかし,移住者や新規開店が増加しているといわれる塩屋の現状や,塩屋住民と外国人の関わりに注目した研究は見られない。

1.3　調査対象地域[文8)]

一般に古くからの塩屋と認識されるのは,現在,塩屋町と呼ばれる地域（１～９丁目及び塩屋町）である。現存する外国人住宅地ジェームス山は,塩屋町６・７丁目に位置し,かつて別荘が多く建ち並んでいたのは塩屋町１丁目,２丁目の海沿いである。

塩屋台は1962年頃,塩屋北町は1974～79年頃にそれぞれ開発された住宅地である。いずれも元は塩屋町の一部であったが,宅地化されたことにより塩屋台,塩屋北町として独立した。開発当初,塩屋台は「公友園」,塩屋北町は「塩屋柏台」と呼ばれていた。

青山台は1950年代後半より開発された住宅地である。このエリア一帯は,元は外国人住宅地の拡張を計画していたジェームスが戦後に取得した土地である。同地を引き継いだ三洋電機創設者の井植歳男(1902-1969)[注5)]は，開発前にこの世を去ったジェームスの思いも引き継ぎ「ジェームス山第〇団地」と名付けた住宅地を開発した[文4)]。以降,青山台辺りはジェームス山と認識されるようになり,青山台には「ジェームス山」と冠した集合住宅や商業施設が多数存在する。そのため本来の「ジェームス山」ではない同地が,異国情緒あふれる塩屋のイメージとして語られることも多い。ただし本稿で「ジェームス山」と記載する時は,特別な記載がない限り,ジェームスが開発した外国人住宅地のみを指す。

以上より,本研究では,「塩屋」というまちのイメージを共有していると思われる,「塩屋」の名を冠する塩屋町,塩屋台,塩屋北町に加え,青山台を研究対象とする。なお,この範囲は,神戸市が地域の基礎データとして公表している塩屋地域の範囲とも異なる[文9)]。

2. 塩屋の住民や元住民への聞き取り調査

本研究では①イベントを通じた公開ヒアリング調査,②塩屋全域でのアンケート調査,③個別聞き取り調査の3つの方法にて，戦前戦後期に塩屋に在住した外国人の暮らしや伝え聞いている話などを収集した。

①イベントを通じた公開ヒアリング調査

終戦から75年を超える今では戦前戦後期の塩屋を記憶する人は少ない。当時の記憶を辿る手がかりになると考え,昔の塩屋の絵葉書や小説などに出てくる塩屋の記述をスライドに投影し,それを見ながら実際に経験した話や両親などから伝え聞く話などをざっくばらんに聞く会を

しおやあれやこれや vol.13　まちのかたちをさがしに

「昔の絵葉書から説き起こす塩屋な生活」

昨年のとあるイベントのあと、参加者のお一人から「はいっ」と軽く手渡されたデータ。開いてびっくり、見たこともない昔の塩屋の景色がたくさん入っていました。こんなに面白いもの、内輪だけで楽しむのはもったいない。みんなにも見てもらいたい！　それをきっかけに、いにしえの塩屋に思いを馳せてみたい！　と、いうわけで、明治から昭和初期にかけての古い絵葉書をスクリーンで見ながら、塩屋のまちやお店、子どもの頃に見聞きした外国人のくらしなどについてのお話を聞かせてください。

2021年7月4日(日) 10時→12時

会場　旧グッゲンハイム邸

参加費　無料

主催　塩屋研究会　協力　塩屋まちづくり推進会・ツイッタラジオ

有料講演　村上徹徳　小尾恵子

問い合わせ　塩屋自治会事務局　078-220-1324　info@shiogiya.net

図 2-1　イベント開催のチラシ

図 2-2　イベント時の会場の様子

企画した[注6)]。そして 2021 年 7 月に「昔の絵葉書から説き起こす塩屋な生活」(参加者 58 名)，2022 年 7 月に「塩屋文学を読む」（参加者 34 名）という座談会形式のイベントを開催した。少しでも多くの参加者を募るため，塩屋駅や地域に設置されている掲示板への掲示やネットやメールなどインターネットを通じた案内などにより，広く一般に参加を呼びかけた。（**図 2-1, 2-2**）。

②住民アンケート調査

2021 年 10 月，塩屋商店会の商圏エリア[注7)]を対象に「昔の塩屋について教えてください」と題した自由記述形の住民アンケートを実施した。アンケート用紙は塩屋商店会の協力を得て，商店会が不定期に全戸配布している新聞「塩屋タイムス」（約 6000 部）第 2 号に挟み込んだ。これにより 5 件の回答を得ることができた。

また，聞き取り調査に協力可能な人については，連絡先等を記入してもらい，後日個別に聞き取り調査を実施した。個別の聞き取りに応じると回答があったのは 2 人である。

③聞き取り調査

地元住民の協力を得て，戦前戦後期の塩屋を記憶している聞き取りに応じてくれる住民や元住民を探し，個別の聞き取り調査を実施した。また 2022 年 10 月 24 日に開催された「徹公の部屋」[注8)]に参加し，参加者の了承を得て外国人との関わりに関する話を追加で聞き取った。

これらアンケートや聞き取り（一部，電話や手紙による聞き取り）調査への協力を得られた対象者の詳細は，**表 2-1** に示す通りである。**表 2-1** の備考には，被験者を特徴付ける内容（外国人に関して語られた事柄があればその内容）を記載している。

表 2.1　聞き取り対象者一覧

	生年	塩屋在住歴	塩屋での居住地
	備考		
A	1930	出生～4歳頃,小学生の頃	塩屋町１丁目（現在は横浜在住）
	祖父母の代に英国から日本に移住し,帰化。幼い頃に塩屋の海沿いの洋館で育つ。その後,山本通に移住し洋館は別荘として利用。戦時中は休暇で訪れていた塩屋の別荘に疎開した。		
B	1931頃	不明	塩屋町３丁目（現在は東京在住）
	高校の頃,塩屋で暮らしていた。一時期,塩屋の洋館を所有していた。（手紙にて聞き取り）		
C	1932	出生～	塩屋町３丁目→塩屋町４丁目
	代々塩屋の商店街で美容院を営む。外国人の髪を切ったこともあるが,海沿いに暮らした人々のような外国人との関わりはなかった。		
D	1934	出生～	塩屋町３丁目
	外国人向けの商品を置く店を手伝っていた。ジェームスからクリスマスプレゼントをもらった。また外国人に雇われて女中をしていたこともあり,ケーキの作り方や紅茶の入れ方などを学んだ。		
E	1935	1957～	塩屋町３丁目
	1957年,結婚を機に神戸西区から塩屋に引っ越した。ジェームス山の名前は以前から知っていた。昔はジェームス山に気楽に入って花見をしたり,杉の枝を取ったりしていた。		
F	1935	1944～	滝の茶屋
	戦時中に塩屋に移住。小学生の頃,英字新聞を配達したことがある。戦時中や占領期の頃の塩屋の商店街界隈をよく記憶している。自身は塩屋町３丁目で印鑑屋を営んでいた。		
G	1937	出生～	塩屋町８丁目→青山台
	塩屋の駅前から塩屋町8丁目に嫁ぎ、現在は青山台に住んでいる。		
H	1939	出生～	塩屋町３丁目
	明治時代から4代続くクリーニング屋を営む。塩屋の外国人を相手に商売をしていた。家は昭和初期に建設された。		
I	1941	1944頃～（結婚後しばらく離れてまた戻る）	塩屋町３丁目
	洋館に小さい頃住んでいた（現在は改修され天理教田鶴教会となった）。海岸沿いに住んでいた欧米人に英語を習っていた。		
J	1943	1960頃～	塩屋町２丁目
	高校時代に塩屋に移住。ジェームス山に住んでいる欧米人に英語を習いに行っていた。大学進学を機に一度,塩屋を離れたが再び塩屋に戻る。		
K	1943	出生～	塩屋町２丁目
	堀江土地が別荘地として開発した土地に祖父が家を建てた。東塩屋の変遷を見てきている。		
L	1947	出生～	塩屋町1丁目
	代々漁師を営む家に育つ。長男が継いだので勤めに出たが定年後に漁師になる。別荘が並んでいた当時の様子,小さい頃に外国人クラブのプールを覗いて叱られたことを記憶している		
M	1949	出生～	東塩屋→塩屋町2丁目
	東塩屋の海沿いにドイツ人が設計したという家に住んでいた。複々線工事のため山側に引っ越した。海沿いに欧米人が住んでいたことや米軍将校のことなどを記憶している		
N	1959	小学生の頃～	塩屋台1丁目
	小学生の頃,造成中の塩屋台（当時は公友台）に引っ越す。欧米人に会うことは滅多になかったが、当時は珍しい外車が道を走るのを見た記憶が残っている		
O	不明	不明	塩屋町3丁目
	明治生まれの義父の話を伝え聞く。塩屋小学校から海までは畑が多く,浜の底引網の声が聞こえた話や漁師の子供が多かったという話など（アンケート記入）		
P	不明	1960頃～	不明
	滝の茶屋にあった店の話やジェームス山の周りの様子などを記憶している（アンケート記入）		
Q	不明	不明	不明
	台風での浸水被害を受けた（アンケート記入）		

3. 塩屋における外国人と地域住民の暮らし

3.1 明治・大正期の塩屋

かつての塩屋は海沿いに小さな集落が確認される程度の寒村で,人々は漁を営み,山で小さな畑を耕す半漁半農の生活を送っていた。開港後,神戸に居留した外国人が,塩屋の環境的価値を発見したことにより,外国人や日本人富裕層が別荘を構えるようになる。明治後半以降,鉄道が西に延びて交通の利便性が高まると,塩屋の海沿いにはホテルや別荘が建ち並び,海外からも外国人が訪れるほどの人気のリゾート地となった。古くから風光明媚な土地として知られる別荘地開発されてきた塩屋の東に位置する須磨とは異なり,未開発の土地が多い塩屋は新たに土地を取得しやすい地域だったと考えられる。

1917 年に兵庫電気軌道が発行した『沿線名勝案内』[文10)]の塩屋停留所の頁には「塩屋の浜」が次のように紹介されている。

塩屋の浜

-当停留所前一帯の海浜を云ふ,波穏にして且つ遠浅なれば夏時海水浴場として最も適当なり,此地元より一小村に過ぎざるも,後に岡巒(こうらん)を負ひ前は海を隔てゞ紀,淡,の諸山に対し風光絶佳なるを以て内外紳士富豪の別荘多し。

(著者によりふりがな追記,旧字体を新字体に変更)

図 3-1 絵葉書:オリエンタルホテル(個人蔵)

海沿いに建ち並ぶリゾートホテルや洋館,海水浴場で楽しむ外国人の様子は当時の絵葉書によって今に伝えられる(**図 3-1, 3-2**)。今では当時を記憶する人はいないが,1990 年代の港湾整備により海岸が埋め立てられるまでは,絵葉書のような風景が残っていたと多くの住民が話す。

海沿いにあった別荘を所有していた英国人医師アチソン(William Lawrence Acherson, 1871-1923)について,H は父親から次のような話を伝え聞いている。このアチソンは,外国人男性たちの交流の場である塩屋クラブの創設者としても名が知られる。アチソンの名前は舌が回らず発音が難しかったので,住民は,「ごんろく」と呼んでいた。アチソンの自宅が居留地の 56 番地(現神戸大丸の南辺り)にあったことから,屋号のようにその呼び名がつけられたという。まだ車が珍しかった当時,アチソンは車を所有していた。1960 年までの住宅地図ではアチソン邸が記載されており,聞き取りによるとアチソンの家族と思われる白人女性が住んでいたという。

大正時代末頃,日本人の多くは和装だったため,洋装にするには,断髪し靴や帽子など一式を揃える必要があった。多額の費用がかかるため,洋装は外国人か日本人富裕層に限られていた。しかし,日清戦争から帰還した 1895 年,H の祖父は,洋服を着る外国人が塩屋に増えてきたことに商機を見出し,塩屋にクリーニング店を開く。洋式のクリーニング技術は従軍時に修得したという。需要が増えて,家族だけでは回らない時には,日本初のクリーニング店ができた横浜から職人を連れてきて対応した。

当時のことを伝え聞く H によると,1923 年の関東大震災以降,横浜から多くの外国人が神戸に避難し,その影響で,塩屋に移住する外国人も増えた。その頃の塩屋の中心は,海の北側を東西に走る国道 2 号線沿い(現塩屋町 1 丁目)だった(**図 3-3**)。国道沿いには 2 つの鉄道の線路も通っていた。そして,その国道沿いには外国人の住宅も 5,6 軒あったという。八百屋や米屋など地域住民を対象とする商店が並ぶ中,外国人のためにパンやバター,ジャム,チーズ,紅茶などを輸入して販売する「日の丸」という店もあった。

図 3-2 絵葉書:海岸沿いの洋館(個人蔵)

図 3-3 1921 年頃の塩屋本通(神戸文書館蔵)

3.2 昭和・戦前の塩屋

昭和初期に開発されたジェームス山は,地域住民には良く知られた場所である。開発に関わった住民もいたようで、現存する入口のライオン像は Dの叔父に依頼があり,石屋を営んでいたDの父も一緒に製作したという。

その頃のジェームス山は,春になると敷地内の桜の下で花見をしたり,子供が虫取りなどをしたり,散歩に行ったりと,地域住民が気軽に訪れる場所だった。ジェームス山の中には遊具のある広場や様々な鳥がいるゲージや猿などがいる小さな動物園のような場所があったことを多くの住民が記憶している。

当時,塩屋小学校の南からジェームス山につながる道があり,この裏道を利用する地域住民もいたという。ジェームスが取得した土地の多くは山林や田畑だったため,住宅地開発に際して,新たに道を付けたと考えられるが,現時点では明らかになっていない。

クリスマスの時期にジェームスが塩屋小学校の児童を招き,プレゼントを配るイベントがあったと,当時小学生だったDはいう。綺麗な格好をして出かけ,言葉を交わすことなくジェームスからプレゼントをもらったこと,ホールにはおもちゃがいっぱいあったこと,サンタクロースの格好をした人がいたこと,外国人の子供と遊んだことなどを記憶している。またカントリークラブのテニスコートのフェンス外にはテニスボールがよく落ちていた。ボールボーイもいたが,外に出たボールを拾うことはなかった。その放置されているテニスボールをDは拾って,鞠つきのようにして遊ぶのが楽しかったと話す。

その頃の塩屋は,未だ半農半漁の暮らしが一般的だった。外国人が増えるにつれ,漁の合間に,外国人宅で手伝いをする住民が増加する。洋館の半地下などに一家で住み込んで働いていた人もいたという。ジェームス山開発によって,外国人住宅が増えたことことにより,使用人の仕事の需要も増加した。

使用人の仕事は,料理,子守,掃除などの家事が内容ごとに細かく分けられ,一人１つの仕事だけを担当した。塩屋では,外国人宅で働く女性は「アマさん」[注9)]と呼ばれていた。それらの仕事は,住民間の口コミや塩屋カントリークラブの斡旋により行われていた。こうして使用人として働いた住民は,その仕事を通じて外国文化を享受した。例えば,食事の準備中につまみ食いをした話や,パーティの残り物でもらったサンドイッチが美味しかった話などがある。他にも,老後の年金をもらったり,老後の家を建ててもらったりした住民がいたという。

塩屋駅前で父が営む美容院で育ったCは,しばしば外国人が髪を切りに来ていたことを覚えている。英語メニューの用意はなかったが,髪型のバリエーションは少なかったので片言の英語でも特に困ることはなかったと話す。また子供同士は外国人の子供だと意識することなく,一緒に浜などで遊ぶこともあったという。外国人の子供の多くは,須磨にあるマリスト国際学校(Marist Brothers International School)[文11)]に通っていたが,日本語を理解する子供も多かった。子守などの日本人とコミュニケーションを取る中で,自然と日本語を覚えたようである。

他にもハーフの子との交流があったというHはチョコレートやチューインガム,コンビーフなどをもらったことを記憶している。終戦後,英語の手紙を受け取ったが読めず,学校の先生に読んでもらって返事を翻訳してもらって書いた。実際に会っている時は,言葉が分からなくても目と目で何となく言いたいことを理解していたという。他にも日本人女性と結婚したり,日本に帰化したりした外国人は日本の文化に馴染み, 日本語ができた外国人と地元住民とは時々交流があった。当時,苗字の読みを無理やり漢字に当て字をした人も少なくなかったという。

一方,英国人の祖父と日本人の祖母を持つAは,昭和初期に塩屋の海沿いに建てられた洋館に生まれた。幼稚園の頃に神戸北野・山本通に引っ越したため,塩屋の家は別荘として休暇のたびに訪れる場所となる。父が帰化し,自身は地元の小学校に通っていたため,A自身は日本人という意識で育った。幼少期の塩屋での暮らしの記憶が曖昧で時期は定かではないが,家に父の友人や仕事関係の外国人の出入りがあったと話す。塩屋の外国人コミュニティの中心人物の一人である,東塩屋在住のジョネス (Frank Morris Jonas,1878-1950)[注10)]が,散歩ついでに家に立ち寄ることもあったという。ジェームス山には親の知り合いもいたが,自身はジェームス山に行くことはほとんどなかった。家には,神戸から毎回１週間位滞在する通いの男性料理人が１人,住み込みの手伝いが２人いた。肉屋や魚屋などは,毎朝,御用聞きが自転車で注文をとりにきて,夕方に配達してくれたので,食料品を商店街で買い物をすることはなかった。他に必要な日用品などは,品揃えの良い神戸都心部まで買いにいっていたと話す。

実は,外国人や日本人富裕層の家が数多く散在していた塩屋では, 早くから肉や魚,八百屋,クリーニング店などの御用聞きが発達していた。御用聞きの多くは,商店の後継ぎや見習いが担っていたため「ぼんさん」[注11)]と呼ばれていた。かつては,外国人が直接買いに来ることもあったというが,次第に御用聞きが主流となった。午前中に各家を周り,その日に必要な食料品の注文を取り,午後に注文された品物を運ぶというシステムである。クリーニング店の場合は洗濯物を預かり,仕上がったものを届けた。ただ御用聞きがやり取りする相手は,使用人であることが多く,外国人当主と直接やりとりをすることはほとんどなかったという。

こうして塩屋には,商店に出向かずとも生活することができる配達の仕組みが整えられていった。そして,次第に御用聞きの間で情報が共有されるようになり,店舗同士の

つながりができた。それが現在の塩屋商店会発足へとつながったといわれている。

ちなみにジャパンクロニクルのディレクトリ[文12]を確認したところ 1933-34 年版では塩屋在住の外国人は 23 人だったが,1938-39 年版では 101 人に増えていた。ジェームス山の開発により多くの外国人が移住,それが地域に与えた影響の大きさが推察できる。こうして,一気に増えた外国人により仕事が創出され,塩屋のまちは潤った。そのため,外国人が住んでいることに対して悪い印象を持つ住民は少なかったようである。

3.3 昭和・戦時中の塩屋

1939年,第二次大戦が勃発すると,イギリスやアメリカなど敵国となった外国人の多くが塩屋を離れた。1940 年 7 月 31 日付の神戸新聞は「贅沢な外人村-塩屋にも問題の高地」という見出しで,彼らの贅沢な暮らしぶりを報じると共に,明石海峡を一望できるジェームス山は,出入りする船を監視できる位置にあると指摘した。またドイツ人もジェームス山を離れ,東垂水や阪神間に転居したという。戦時体制に入り,特に英国人に対する対応は一変したことがわかる。同年,ジェームスはスパイ容疑で逮捕される。このニュースを記憶する住民もいたが,ジェームスに対して悪い印象は持たなかったと語る。

翌1941年には英国人であるジェームスの資産は敵国資産として日本政府の管理下に置かれることになり,住宅やクラブ施設は日本軍に接収された[文10]。同年,日本での事業継続が難しくなったジェームスは塩屋を離れてカナダに移住する。また英国人実業家のジョネスも,塩屋への疎開を希望した日本人に家を売却して塩屋を去った。

それでも一部の外国人は塩屋に留まり続けた。名前を変えたり,国籍を変えたり,日本人と結婚したりと色々工夫をしていたようだとCは話す。既往研究により,1942年当時のジェームス山には空き家が増加したが,フランス人やポルトガル人,スイス人,スウェーデン人,ルクセンブルク人の他,敵産管理会社の社員と見られる日本人が住んでいたことが確認できている[文3]。

小学生の頃,新聞配達をしていたというFは,戦時中も変わらず朝日や毎日,読売,神戸の各紙に加えて,外国語の新聞も数部混ざっていたことを記憶している[注12]。また日本軍に拘束された外国人,日本軍に目をつけられてしばしば特攻警察が来ていた外国人などがいたとHは話す。

日本軍の接収により,幾つかあるジェームス山の入口には,日本人憲兵が立つようになった。しばしば彼ら憲兵は,通行料や賄賂などを要求したので良い印象を持っていなかった話す住民もいた。その頃,ジェームス山にいた鳥や動物は殺処分されたという。こうして,住民が自由にジェームス山に出入りすることはなくなった。

このようにジェームス山を日本軍が接収したことにより,重々しい雰囲気に生まれていたことが想像できる。しかし,戦時中を知る住民は外国人との摩擦はなかったと話す。また,1967 年 1 月に塩屋カントリークラブで開催された講演会で,戦時中の塩屋には空襲被害はほとんどなく,神戸の他地域と比べると穏やかだったと H.S.ウイリアムス (Harold Stannett Williams,1898-1987) [注13] は語っている[文13]。

戦時中,塩屋は外国人が多く住むジェームス山があるから爆弾を落とされることがない安全な場所だと多くの人々は認識していた。当時,日中には太陽光を鏡で反射したピカピカとした光,夜間にはチカチカと赤や黄のライトの光がジェームス山から放たれていたのを見たという住民もいる。ジェームス山が攻撃されないように米軍に合図を送っていたのだという。この噂話が事実かどうかは定かではないが,塩屋は安全だと信じて神戸都心部から,塩屋に疎開してくる人も少なくなかった。神戸北野山本通の家に引っ越したAも,戦時中は塩屋の別荘に疎開し,電車で諏訪山小学校まで通学していたと話す。そしてAの父の会社関係者数人で垂水に畑を持っていて野菜を調達していたという。

またFによると 1944 年頃の塩屋の山には山桃やびわ,無花果などが自生しており,畑には野菜や芋などが育てられていた。土手には土筆,イタドリ,ゼンマイなどが自生していて,川には鰻や鮒,メダカ,蛍など,海にはキス,カレイ,イカナゴ,イワシ,ワカメなどの魚介類が生息していて食べることができた。またジェームス山の一部も畑となり,サツマイモなどが植えられていた。このようにして,戦時下でも住民は食糧を調達し,幾度かの空襲にあった神戸都心に比べると,穏やかな日常を過ごしていた。

3.4 昭和・戦後の塩屋

1945 年に終戦を迎えると,敵国資産として日本軍に差し押さえられていたジェームス山は新たに進駐軍に接収される。ジェームス山の賃貸住宅には神戸に駐留した米軍将校が暮らした[文5]。米軍は塩屋の町中には出入りしなかったという人もいたが,国道だけでなく狭い路地にもジープで入ってきて,家にぶつかっても壊しても補償もせず,勝てば官軍という感じだったとLは話す。同様に,戦争に負けた日本人は卑屈になっていたが外国人は威張っていたとHは記憶する。進駐軍に日本の風習について助言していた陸軍大佐の外国人はスパイと呼ばれていたという。一方,進駐軍との交流はほとんどなかったというDは,見かける彼らに対しては紳士的なイメージを持っていたと語る。

当時,一部の米軍兵士は電車でベースキャンプに通勤していたようで,Aは通学電車で毎日,彼らを見かけたと話す。塩屋駅は塩屋ステーションと呼ばれていたという。彼らはジェームス山の最寄り駅である滝の茶屋駅から山

陽塩屋駅で国鉄に乗り換え,神戸に向かった。

また,東塩屋（現塩屋町２丁目）国道沿い南側には,板張りのプレハブでできた平屋のダンスホールがあった。東塩屋に住んでいたＫとＭは, 夜中,外国人のジープに乗った日本人女性や,外国人と連れ立って歩く洋装で帽子をかぶった女性をよく見かけたという。

戦時中,神戸都心にあった神戸クラブや神戸レガッタ＆アスレチッククラブなどの外国人施設は空襲により焼失したため,塩屋カントリークラブは神戸で唯一機能している外国人施設となった。そのため海沿いの塩屋カントリークラブのビーチクラブが神戸レガッタ＆アスレチッククラブの活動拠点となった。戦後,ビーチクラブの建物の前にあったプライベートビーチで楽しむ外国人のことを記憶する人は多い。

戦後も国道沿い海側には多くの外国人が暮らしていた。優遇措置だったのかは定かではないが,国道の北側は停電しても,南側海沿いの電気が消えることはなかったという。駅よりも北側に住んでいたＣは,この話を知り驚いていた。塩屋は国道や鉄道を境にして,南北のコミュニティが分かれているため,このような情報は共有できていなかったと考えられる。

また終戦直後は塩屋に暮らす外国人も配給制度により食料などを調達していた。進駐軍がヘリコプターでビーチクラブ前の海岸に食料や物資を降ろし,それを日本人従業員が配達していた。そこにいた外国人が,チョコレートやココア,カンパンなどの食料を分けてくれたとＤは話す。また外国人宅で働く使用人が,クリーニング屋に預けるシーツの中にパンなどの食料をこっそり入れたり,外国人宅で働く料理人から油や砂糖をもらったりということもあったようだ。他にも,美容院に食料などを持ってくれる外国人客やビーチクラブで開催したパーティで残った食料を分けてくれる外国人もいたという。このように浜辺の住民や御用聞きや商売を通じて外国人との関わりがあった一部の住民は,様々な恩恵を受けていた。

一方,神戸市西区の農家で育ち,町に嫁ぎたいと思っていたＥは,1957年,結婚を機に塩屋に引っ越した。塩屋には,静かでハイカラなまち,という印象を持っていた。塩屋にはジェームス山があるということは聞いていたが,本当に外国人がいて変わった自動車が通るなあと思った,と話す。ジェームスが雉狩りをして,雌の雉は剥製にしたという話が西区にまで伝わっていたという。しかし,戦争で負けて外国人は怖いという印象を持っていたので,道で外国人を見かけても挨拶はしなかったとＥは話す。このように戦前に外国人との関わりがなかった住民にとって,敵国だった外国人を受け入れるのは複雑な感情を伴っていたようである。

戦後も,肉屋や魚屋をはじめとする塩屋の商店は,ジェームス山などの邸宅への御用聞きや配達を続けていた。商店の子供だった人々は当時の思い出を懐かしそうに語る。訪問先では戦前と変わらず日本人の使用人や料理人が応対した。ジェームスをはじめビッカードやウィリアムス,アンタキ,エビラハムなど,大邸宅に住んでいたり,日本人と結婚していたりしていた外国人は地域では有名だったようである。外国人との特別な交流はなかったものの,毎日のように店の手伝いでジェームス山に通っていた。子供ならではの視点で見た,その頃の外国人の暮らしぶりや伝え聞いた話をユーモラスに親しみを持って語る店主も多い。例えば,首にお金を巻いてジェームス山から犬が買い物に来たこと,贅沢に刺身用の魚を猫の餌にしていたこと,サンドイッチの残りなどをもらったことなどである。肉屋の御用聞きは,ジェームス山では「meat boy」と呼ばれていたとＩはいう。そして,ジェームス山に出入りする御用聞きに口を聞いてもらい英語を教えてもらう外国人を探したと話す。

駅前の八百屋店を手伝っていたＤは,外国人の好むものを神戸の明治屋と取引して仕入れていた。神戸都心に行けば海外のものは大体手に入るので,仕入れはさほど難しくなかったという。注文は,例えばツナ缶だと１ダース,バターだと１ポンドという英国の単位が使われていて,それに対応していた。現存する店舗内には,英語で書かれた案内看板が残されており,往時の様子が窺える。ほぼ毎日,自転車でビーツやエシャロット,ホースラディッシュ,オリーブなどの洋物野菜やレモネードやジンジャエールなどを外国人宅に配達していた。またカントリークラブでは,毎週のようにパーティが開催されており,そのための注文を受けていた。

占領下においては外国人に対して嫌悪感を持つ人も多かったが,平和な時代になると再び外国人の家で使用人として雇われる住民が増えた。前述の通り, 家事が内容ごとに細かく分けられていたので,当時は１軒あたり６人位の使用人が雇われていたという。

使用人がパンやケーキなどを作っていたので,塩屋にパン屋やケーキ屋などがなくても問題なかった。外国人の家で食事の支度を手伝っていたＤは,アップルパイやシフォンケーキ,スコーンなど上手に作ったり,美味しく紅茶を入れたりすることができるようになった。塩屋に居住した外国人の多くは英国系だったからか,「外国人のところに勤めていた人はアフタヌーンティで紅茶を飲むことが習慣になった。朝も絶対紅茶でコーヒーはあんまり飲まない。塩屋は紅茶文化発祥の地のようなもの」という住民もいた。世話をしているお地蔵さんにも紅茶を供える人もいたそうだ。また,住み込みで働いていた使用人の子供は,外国人の子供とばかり接していて,小学校入学時に日本語が分からなくなっていたという話もあった。その子供は,その後,外資系の銀行に勤めたという。

このように使用人や御用聞きとして外国人宅に出入り

する塩屋住民を通じて,間接的に外国人の豊かな暮らしぶりや文化が塩屋に広がっていった。例えば,外国人向けの商店で商品を買う住民はほとんどいなかったが,外国人住宅に出入りしていた住民は紅茶,輸入食材などを購入し,自宅でパンやスコーンなどを作り,人にふるまうこともあったという。

3.4 昭和・1950年以降の塩屋

1952 年にジェームスがこの世を去ると,管財人となったウィリアムスがジェームス山の管理人を務めるようになる。ジェームスが建設した賃貸住宅はシロアリの被害を受け,住宅地も台風による土砂崩れなどの被害にあうなど,修復費が嵩むようになる。また高度経済成長期に差し掛かった日本においては,人件費も高騰し, ジェームス山の維持管理には多額の費用がかかるようになっていく。そしてジェームスの莫大な資産にかかった相続税も巨額で,遺族には支払うことができなかった。そこで, 1954年,ウィリアムスは苦渋の選択をし,ジェームスが遺した資産を全て井植歳男に売却する。自身はジェームス山の最北に自邸を構え,生涯をそこで過ごした。その後もしばらくはウィリアムスが管理人を続けていたが,1961 年以降は井植家の財産管理会社である塩屋土地が管理するようになり,現在に至る。

実は, ウィリアムスは住宅地入口に立ち入り禁止と書いた看板を立て,住民以外が住宅地に入ることを禁じていた。しかし住民は,戦前と変わらずジェームス山に自由に出入りしていたようだ。当時のジェームス山には老朽化による空き家が増えていた。春にはお弁当を持ってジェームス山の中で花見をしていたという。英語の看板は読めなかったので気にせず入っていたが怒られることはなかったとEは話す。そして勝手に取っていいと聞いていたので,初盆の時に仏を祀るための杉の枝をジェームス山に取りに行っていたという。敷地内でジェームス山の住民に会うことはほとんどなかったと多くの住民はいう。このようにウィリアムスがいた頃のジェームス山には,戦前の牧歌的な雰囲気が残っていた。

東塩屋の海沿いにあったMの家はドイツ人の設計により建てられた。１階が和風,２階が洋風だったが,外観は和風だった。東隣にはジョネスの家（和館と洋館）があった。戦後,日本人所有当時のジョネス邸に入ったことがあるというKとMは,芝生の庭に噴水があったことを鮮明に覚えている。自分たちが住んでいる家とは全く違う家だったので記憶に残っていると話す。ジョネス邸より東側には和風の家が建ち並んでいたが,そこにも外国人が住んでいたという。しかし1959年より始まった国鉄の複々線事業を受け, 1963年ごろに塩屋の線路も複々線化する。これに伴い東塩屋の海岸沿いの建物は解体を余儀なくされ,幾つか建っていた洋館も滅失した[文2)]。

鉄道の複数路線化,複々線化により,塩屋の商店街は国道沿いから広がり,塩屋駅から北側にのびる道沿いに駅前商店街（塩屋町３丁目）が形成されていく。そして次第に国道の海側から塩屋谷川を越えて駅や駅前商店街を結ぶ道（塩屋町４丁目）が栄えはじめる。こうして,まちの中心は次第に鉄道の北側へと移動し,現在に至る。

1964 年,垂水区では３店舗目となる灘神戸生協（現コープミニ塩屋）[注14)] が駅の北側にオープンした。1970年後半から1980年はじめまでは,鉄道の南側の国道沿いに郵便局,その並びの店舗が営業し,駅前商店街,山陽電鉄高架下,国道と線路を隔てた山側とを結ぶ街路全てが賑わいを見せる。1970 年頃になると,御用聞きをきっかけに生まれたといわれる塩屋商店会には80店舗以上,塩屋の商店の９割近くが加盟していたという。

1963年,４歳の頃,開発されたばかり塩屋台に越してきたというNは,当時はそこが塩屋で一番奥（北）だったと話す。その頃の塩屋の北部は,神戸少年の町[注15)]やジェームス山しかなく,細い旧道が麓まで続いているだけの地だった。たくさん豪邸はあるけど,ひっそりしていて,外国人にも会うことはなかったので,塩屋に外国人が住んでいると知ってはいたけど実感はなかったと,Nは当時の印象を語る。間接的に外国人と関わってきた古くからの住民と,戦後に塩屋に移住してきた住民にとでは,外国人に対する感じ方は異なっているようである。

1987 年にウィリアムスが亡くなると,ジェームス山の一番北側に位置していた彼の大邸宅は集合住宅に建て替わった。ジェームス山の主要な道路形状は維持されているが, 宅地の形状は改変されジェームスが建設した賃貸住宅は全て建て替えられた。またジェームス山を取り囲んでいた東側の山林の一部は宅地開発され,集合住宅や戸建て住宅へと変化した。その時に裏道もなくなった。

同様に,日本で成功をおさめ,塩屋の後背地や海沿いに大邸宅を構えて贅沢を謳歌していた外国人富裕層も徐々に姿を消していく。それらの大邸宅は,マンションやミニ開発による戸建て住宅へと建て替わっていった。そして今では,ジェームス山以外の場所に邸宅を構えて塩屋に居住する外国人はほとんどいなくなった。

その後,塩屋台や青山台など北側の開発が進み,塩屋と認識される範囲は広がっていくが,その裏で,塩屋に根を下ろしていた外国人は姿を消していった。ジェームス山の住民も,かつてのように日本に永住を望む外国人ではなく,短期間だけ日本に滞在する駐在員に変わっていく。会社の手当で居住する駐在人は,使用人を雇う金銭的余裕はなく,新しくできた大型店舗などで買い物をするため,御用聞きも必要とされなくなった。しかし坂が多く起伏のある塩屋は,重い荷物を持って徒歩で坂や階段を昇降するのが難儀するまちである。今でも,その難儀を軽減するため,老舗の商店はこの御用聞きの仕組みを緩やかに継続し

ている。例えば,J は馴染みの店に電話で注文をしたり,商店で直接購入したりした商品を自宅に配達してもらっていると話す。

使用人や御用聞きとしてジェームス山に出入りする住民は姿を消した。また,管理人が厳しくなって関係者以外は敷地に入りにくくなったため,かつてのように自由にジェームス山を訪れる住民は減った。往時を知る住民は,ジェームス山に住む外国人の入れ替わりが激しくなり人間味がなくなった,前の方が情緒的だったと話す。その後も,外国にゆかりのある日本人が,三ノ宮で始めた商売を塩屋に移して開店させた店や外国人の商品を扱う店も出来たが, 多くは塩屋住民に向けたもので,外国人を相手に商売をする商店は減っている。

こうして,今も外国人のみが居住するジェームス山は,地域から切り離された閉ざされた場所となっている。そしてジェームス山以外にあった外国人邸宅の多くも滅失したため,塩屋にあった外国人と地域住民との緩やかな関わりは失われていった。

4 今日の塩屋

4.1 塩屋在住の外国人

法務局の統計[文14)]によると, 2021 年 12 月末の垂水区在住の外国人人口は 2732 人である。町別の外国人人口や細かい国籍の情報は公開されていないため, 昭和期における塩屋在住の正確な外国人数や垂水区在住の外国人国籍については不明である。公開されている情報によると,中国やベトナム,韓国などのアジアの国籍を持つ人が 2203 人で全体の 8 割を超え,他は米国籍 98 人,その他 431 人である[注16)]。

1922 年 12 月末当時の垂水村在住の外国人数は 163 人であり[文15)],その内訳は,英国 83 人,ドイツ７人,米国 22 人,清国 27 人,フランス６人,ロシア８人,イタリア２人,デンマーク４人,オランダ４人だった。当時の垂水村と現在の垂水区の範囲は完全には一致しない[注17)]が,西洋人が８割を超えていたことは事実である。2 章で述べた通り,1938-39 年当時の塩屋には少なくとも 101 人の西洋人が在住していたこともわかっている。以上から,塩屋在住の西洋人の割合も戦前より減少しているということがいえよう。

4.2 各地区の年齢階級別人口推移

ここでは,塩屋に移住者が増えている実態を把握するため,統計データを用いて 2020 年現在の年齢階級割合を分析した（**表 4-1**）[文16)]。対象は,青山台,塩屋北町,塩屋台,塩屋町である。15～64 歳の生産年齢人口の割合は,塩屋町が最も高く 58.9%となっている。ちなみに,神戸市では 58.8%,垂水区では54.4%であることから,塩屋町の割合は神戸市とほぼ同じであることがわかる。

表 4-1 各地区における年齢階級別割合（2020 年現在）

	14歳以下	15-64歳	65-74歳	75歳以上	合計
青山台	507 人	3209 人	955 人	1171 人	5842 人
	8.7%	54.9%	16.3%	20.0%	
塩屋北町	365 人	1569 人	419 人	426 人	2779 人
	13.1%	56.5%	15.1%	15.3%	
塩屋台	177 人	973 人	285 人	399 人	1834 人
	9.7%	53.1%	15.5%	21.8%	
塩屋町	1235 人	5842 人	1297 人	1548 人	9922 人
	12.4%	58.9%	13.1%	15.6%	

※神戸市「町別世帯数年齢１歳階級別人口統計（垂水区）」より

表 4-2 塩屋各町における年齢階級別割合（2020 年現在）

町名	塩屋町（西）	塩屋町（東）	塩屋町1丁目	塩屋町2丁目
人口	721人	497人	405人	62人
15-64歳割合	70.7%	52.7%	62.8%	45.3%
町名	塩屋町3丁目	塩屋町4丁目	塩屋町5丁目	塩屋町6丁目
人口	616人	485人	536人	1128人
15-64歳割合	57.7%	57.5%	64.0%	55.7%
町名	塩屋町7丁目	塩屋町8丁目	塩屋町9丁目	
人口	508人	185人	699人	
15-64歳割合	60.0%	53.6%	57.7%	

※神戸市「町別世帯数年齢１歳階級別人口統計（垂水区）」より

現在の塩屋町は,塩屋町(字名が残る東側と住宅地開発された西側）と塩屋町 1～９丁目からなる。この塩屋町を町ごとに分析したものが**表 4-2** である。これを見ると,塩屋町２丁目の年齢級割合が低く,ジェームス山の山林を宅地開発した塩屋町（西）の割合が最も高くなっている。2001 年と 2021 年の人口を比較したところ,塩屋町２丁目は 3 人の増加と変動がほぼなかった。また塩屋町１丁目は 86 人,塩屋町６丁目は 48 人の増加となっていた。外国人邸宅跡の開発により,人口が増えたものと思われる。そして宅地造成が行われた塩屋町７丁目は 698 人,や塩屋町（西）は 395 人の人口増となっていた。

4.3 若い世代の移住と塩屋のイメージの変化

2014年より旧グッゲンハイム邸に拠点を置くクリエイター集団「シオヤプロジェクト」[文17)] による「まちをいじって遊ぶ」活動が展開している。彼らは独自の視点で「塩屋」を歩いて楽しむまちとしてプロモートしている商店会とも連携し,「しおさい」や「塩屋市」などを手掛けている。徐々に商店会を中心とした緩やかなイベントも,外に知れ渡るようになり,塩屋でのビジネスチャンスを見出す若い世代の増加している。ちなみに現在の塩屋商店会の加盟数は 75 店舗となっている。

特に 2000 年以降には,塩屋町３,４丁目にて活動する団体や開店した店舗が多くみられる。2020 年以降は,厳選した産地のカカオ豆から板チョコまでを手がけるビーン・トゥー・バーのチョコレート屋や英国菓子を専門に販売する店など個性的な店も増えている。他にも一時期廃れていた通りに,欧米では定着しているスリフト・ショップに近いチャリティ古着の店舗が開店し, 新しい風を吹き込んでいる。他にも家庭や飲食店への配達が主な事業としてきた老舗の酒屋が,実店舗を縮小して多目的に使

える空間にリノベーションして解放したところ,雑貨屋や花屋等が間借りを始めた。このように,近年は塩屋住民や外国人を超え,観光客も視野に入れたような店舗が増えている。

近年, ロータリーがない駅前,駅を降りるとすぐ目の前に現れる車の進入できない商店街の狭い道,建込んだ商店街の店の構えなどは若い世代を中心に「昭和レトロ」と好意的受け止められている。また丘陵地に点在する洋館や路地風景など様々なビュースポットを獲得することができる,タイムスリップしたような異国情緒溢れるレトロな塩屋の風景が,SNSに投稿する写真の撮影場所として人気となっている。新規店舗が増加している背景には,このようにSNSなどで発信された塩屋イメージを求めて訪れる風潮が年々強まっていることが挙げられる。そして投稿写真が,新たな人を塩屋に呼び込む循環も起きている。

そしてコロナ禍に新規オープンした店には,シオヤチョコレート,塩屋スコーン,シオヤドリアなど店名や商品名に「塩屋」を冠したものが多い。以前は,外国文化,ハイカラなイメージを付加していた「ジェームス山」がよく用いられてきたが,「塩屋」という地名そのものがブランド化してきていると考えられる。多くの洋館が姿を消し,塩屋に根付いた外国人が減った今日において,塩屋のイメージも変化してきているのかもしれない。

5. 1960年頃の塩屋の状況

ここでは,これまでの調査により得られた情報を地図上にプロットし1960年頃に塩屋に住んでいた外国人の居住地,地域住民と外国人との関わりを視覚的に把握することを試みる（**次項図5-1**）。この作業では,2010年に制作された塩屋見聞録[文18]も参考にしている。1960年頃を対象としたのは,住宅地図で遡れる最も古い年であることと,まだ多くの外国人が居住していたと考えられることによる。また戦前から続く外国人と日本人の関係を見るのには良い時代と判断したからである。

外国人の居住地の特定には,住宅地図を用いた。現在確認できている塩屋の住宅地図の最古は神戸市全産業住宅案内図帳垂水区[文19]の1956年版である。他にも1958年版,1960年版が出版されているが,いずれも地図としての精度は低く,外国人名の有無の確認にしか使えない。そこで地図としての精度が高まったと考えられる1980年版を基に,長く居住する住民の名前を手がかりに外国人の居住地を推定し,斜線で示した。聞き取りにより外国人が住んでいたとの証言があったとしても,住宅地図には記載されていない場合もあった。それはコメントで記している。

前述の通り,かつて山林だったジェームス山の敷地の一部は後に宅地開発・区画整理が行われた。これにより,現在のジェームス山の敷地形状は,ジェームスが開発した当初のものとは異なっている。区画整理が行われた今日の地図情報では,当時の範囲を特定することは難しいため,入手した最新の白地図をベースに,昔の空中写真や住宅地図と現在の地番や町名などを照らし合わせ,1960 年頃の範囲を推定した。それが緑の点線で囲われた部分である。ジェームスが建設した賃貸住宅は全て建て替えられ,一区画の面積も改変された。本研究では,戦前戦後期に建っていた賃貸住宅の推定位置をプロットした[注18]。

現在の塩屋商店会事務局は地図で示した通り,塩屋駅北側に位置する。1960 年当時,国道沿いと駅の北側に商店街は広がりを見せていた。地図上に示した塩屋小学校からジェームス山に続く裏道がなくなったことにより, ジェームス山へのアクセスは,ジェームス邸の東側を南北に通るメインの幹線道路のみとなった。

また住宅地図によると1980年ごろまでは,塩屋町6丁目とジェームス山がある塩屋7丁目そして海岸沿いに1960年とほぼ変わらない外国人名を多く確認できた。港湾整備により海岸も埋め立てられた1990年代になると,ジェームス山以外では,外国人名がほぼ確認できなくなる。

6. まとめ

本研究では,聞き取りにより戦前から戦後にかけての外国人と住民の関わりについて明らかにしてきた。戦前から塩屋に住んだ外国人は,大邸宅に住み贅沢を謳歌していた。特にジェームス山ができてからは,半農半漁の生活の合間に外国人の邸宅に使用人としてパートのように雇われる人が増加した。また外国人宅を訪問し,朝に注文を取り夕方に配達をするという,御用聞きの文化が塩屋に根付いていった。このように外国人の増加に伴い,外国人に関わる仕事に従事する住民が増え,塩屋は潤った。外国人を町中で見かけることはほとんどなかったが,住民は邸宅への出入りを通じて欧米文化を享受していた。そのため,戦時中も比較的穏やかな暮らしを続けていた古くからの住民は,外国人に対して親しみを持ち見聞きした話を語ることが多い。一方,戦後に塩屋に移住し,外国人に対して複雑な感情を持っていた住民もいた。それでもジェームス山に出入りしたり,外国人に関する仕事に従事したりして,間接的に外国人と触れ合い,自然に異文化を受け入れていた様子が窺えた。

ジェームスが亡くなり,管財人だったウィリアムスもいなくなると,ジェームス山の居住者も変化していく。数年で本国に帰る駐在員が増え,使用人を雇うような贅沢な暮らしをする外国人はいなくなった。時を同じくして大邸宅も次々滅失し,集合住宅や建売住宅などに姿を変えていった。連動するように塩屋北部では住宅地開発が進み,スーパーなどの大型店が増加していく。このような状況に危機感を持った住民により,過去の記憶を掘り起こし塩屋の新しい魅力のアピールにつなげる地道な活動が始まった。それが功を奏し「塩屋」という地名がブランド化さ

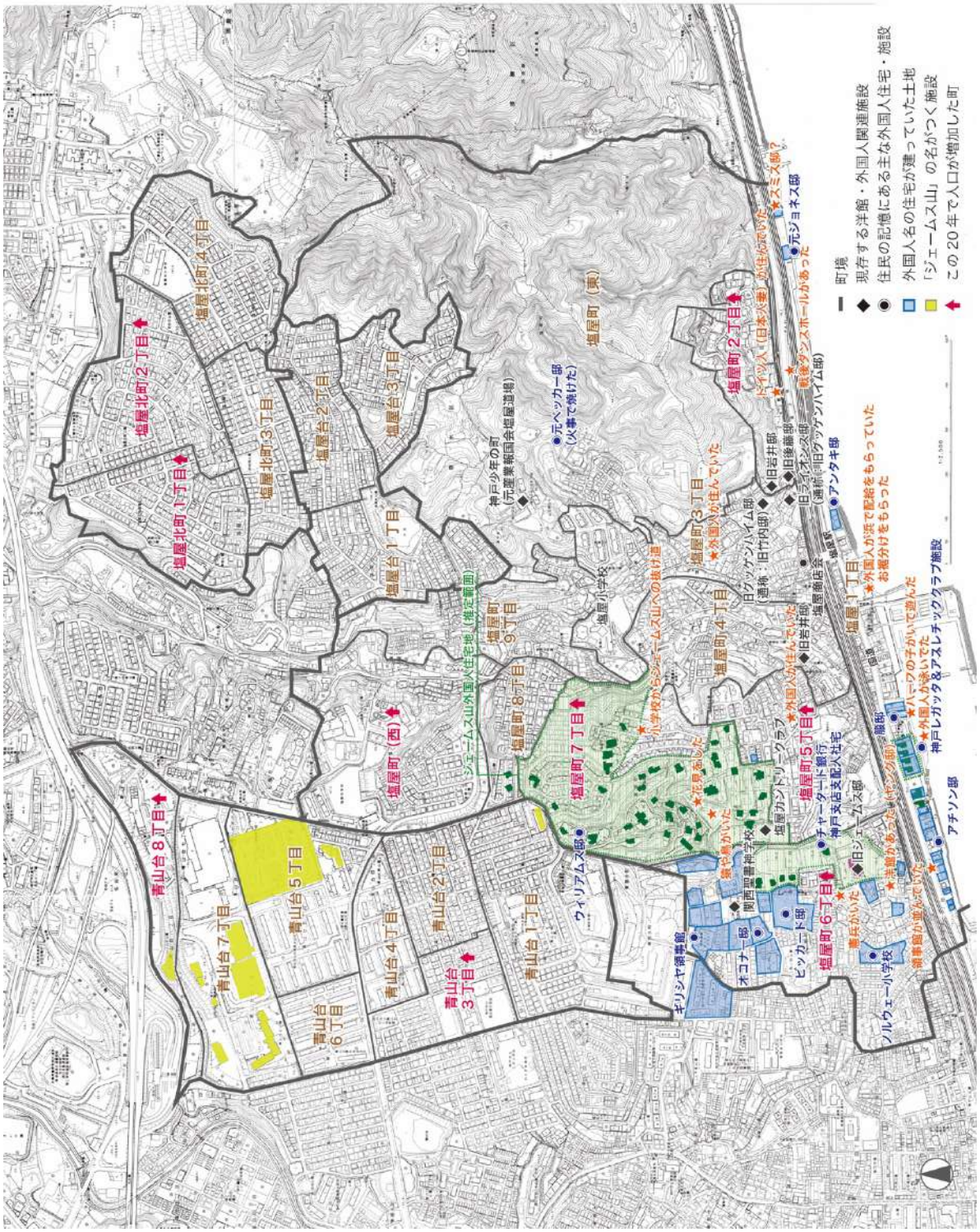

図 5-1　1960 年頃の塩屋の様子（ベースマップは 2019 年現地調査に基づく 1/2500 白地図である）

れたことが，近年の若者やクリエイターの流入に結びついたといえる。一方で外国人が暮らすハイカラな街というイメージは徐々に薄れつつあるように思われる。外国人と緩やかに繋がり，自然な形で受け入れてきた地域住民の姿勢は，移住者にとっては心地よく感じられるのかもしれないが，その解明には，移住者に対する聞き取り調査が必要である。それについては今後の課題としたい。

＜謝辞＞

本研究を進めるにあたり塩屋商店会をはじめ，多くの関係者の方の協力を得ました。公開ヒアリングの際，村上忠男氏や中尾嘉孝氏より貴重な資料を提供いただきました。また聞き取り調査に快く協力いただいた住民や元住民の方々，個々の名前を挙げることはできませんが，ここに記して感謝申し上げます。

※本研究は JSPS 科学研究費 20K04899（代表：水島あかね）の成果を一部に含んでいる。

＜注＞

1）1955年に前身となる塩屋商店会連合会が発足し,2012年に一般社団法人塩屋商店会へと引き継がれ今に至る。https://nice-shioya.jp/（2022.10.23閲覧）

2）2021年に旧グッゲンハイム邸は旧ライオンス邸であるという建物名称の間違えの事実が明らかになったが,本稿では既に地域に定着している旧グッゲンハイム邸という呼称を用いる。（参考文献１）

3）神戸で生まれ育った2世英国人である。親日家で,戦前期に日本に居留した外国人の中で最も資産を有した。

4）塩屋における戦前期の洋館分布については参考文献２）ジェームス山に居住する外国人の戦前戦後の変化については,参考文献３）,明治以降の外国人による土地取得と運用については参考文献４）５）が詳しい。

5）1954年から1961年にかけて,ジェームスの所有地の大半を引き継いだ。その後現在に至るまで,井植家の土地管理会社である塩屋土地（株）がジェームス山を管理している。

6）これらのイベントは,本研究のため設立した塩屋研究会が塩屋まちづくり推進会やシオヤプロジェクト等と連携し,不定期に開催されている「まちのかたちキオクノキロク」のシリーズの一環として企画した。

7）塩屋商店会の商圏は塩屋中学校の校区にほぼ一致する地域と考えられている。今回は,塩屋町１～９丁目,字南谷,字大谷,塩屋台１～３丁目,塩屋北町１～４丁目,青山台１,２丁目の一部,唐ケ谷,下畑町,下代,東垂水町自由が丘,松風台に全戸配布した。

8）昔の塩屋を知る人々から話を聞き記録を残すため,ある塩屋住民が不定期に開催している会のことである。

9）中国語で祖母を意味する「阿媽」が東アジア圏において、外国人の家庭に使役された現地人の召使を指す語「amah」となった。ベビーシッターは「ベビアマさん」と呼ばれていたという。

10）英国人と日本人の間に生まれた２世である。塩屋の西向地蔵尊にはジョネスと書かれた石碑が現存している。

11）小さい子供を「坊主」と呼ぶところから派生し,若者の見習いを「ぼんさん」と呼ぶようになったという。

12）当時は,専属一紙ではなく,各紙をまとめて配達していた。

13）オーストラリア人実業家・歴史家。ジェームスの管財人として,人生の大半をジェームス山で暮らした。日本に居留した西洋人に関心を持ち,多くの史料を収集し,その成果を論考や書籍などにまとめた。彼が収集した膨大なコレクションは,現在オーストラリア国立図書館に所蔵されている。

14）コープ塩屋店は阪神淡路大震災で全壊し,再建後にコープミニ塩屋として再開している。（https://nice-shioya.jp/（2022.10.27参照））

15）1948年に設立された戦災孤児のための施設である。進駐軍が接収していた元産業報国会の建物を再利用している。現在は乳児院を備えた児童養護施設となっている。

16）朝鮮,インドに係る市町別の人員数は公表されていない。

17）当時の垂水村は,山田,多聞,西垂水,東垂水,塩屋,下畑,名谷の７つの大字から構成されていた。その後開発された住宅地の一部は西区に編入された。当時から住宅地だった地域が現在の垂水区とほぼ一致する。

18）参考文献２）,米軍撮影空中写真（USA-M324-A-6-4）および塩屋土地所有の「ジェームス山外人住宅現況図」などを基に住宅の位置を推定した。

＜参考文献＞

1）水島あかね, 笠原一人：神戸市塩屋の洋館・旧ライオンス邸と旧グッゲンハイム邸 － ２つの住宅の取り違え問題と新事実 について,日本建築学会技術報告集28,pp.494-499,2022

2）水島あかね,浅見雅之,玉田浩之：地域資産としての近代住宅の保存継承に関する研究-神戸市塩屋を対象にして,住総研 研究論文集No.42, pp.157-168, 2016

3）加藤麗,水島あかね,玉田浩之：戦中戦後期の神戸市塩屋ジェームス山外国人住宅地における居住者の変遷,日本建築学会大会学術講演梗概集,pp. 915-916,2018

4）水島あかね,玉田浩之：神戸市塩屋ジェームス山の戦後拡張計画について,日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集16,pp.1-4,2018

5）水島あかね：神戸市塩屋における外国人住宅地の開発と変容-「ジェームス山」の誕生,中川理他：空想から計画へ-近代都市に埋もれた夢の発掘,pp.189-214,思文閣出版,2021

6）西野 雄一郎,竹下正高,本田祐基,徳尾野徹,横山俊祐：Co-Renovation の特性に関する研究（その１）：人の繋がりからみた戸建住宅地におけるリノベーションの有効性-神戸市塩屋を対象として, 日本建築学会計画系論文集VOL.87 No.792,pp.272-282,2022

7）辻七虹,木多道宏,松原茂樹,下田元毅：まちのアイデンティティの醸成・継承過程に関する研究―神戸・塩屋と旧グッゲンハイム邸を対象として―, 令和３年度日本建築学会近畿支部研究発表会,pp.161-164,2021

8）神戸史学会：神戸の町名　改訂版,神戸新聞総合出版センター,2007

9）垂水区地域の基礎データ（塩屋地域）：https://www.city.kobe.lg.jp/a56164/kurashi/activate/participate/localdata/data-tarumiku.html（2022.10.23閲覧）

10）有馬覚之進：兵庫電気軌道沿線案内,兵庫電気軌道株式会社,1910

11）https://marist.ac.jp/（2022.10.27参照）

12）The Japan Chronicle：Chronicle directory(Kobe),1933-34・1937-38

13）オーストラリア国立図書館（MS6661/Box17/File114）

14）e-stat：https://www.e-stat.go.jp（2022.10.23閲覧）

15）神戸市：神戸の統計,https://www.city.kobe.lg.jp/a47946/shise/toke/toukei/index.html（2022.10.23 閲覧）

16）垂水村編：垂水誌,垂水区役所,1973

17）シオヤプロジェクト：http://www.shiopro.net（2022.10.23閲覧）

18）塩屋まちづくり推進会：塩屋見聞録vol.I,II,2010

19）神戸地学協会：神戸市全産業住宅案内図帳（垂水区）1956,1958,1960

・Harold S. Williams O.B.E.:The Story of Shioya,of The James Estate, of James YAMA and of the Shioya Country Club, The International Committee of the Kansai,1984

＜研究協力者＞

山森彩　合同会社ユブネ